小説日本芸譚

松本清張

小説日本芸譚

定価は帯またはカバーに表示してあります。

新潮文庫 草109 A

昭和三十六年六月二十日 発行
昭和四十五年九月三十日 十一刷

著者 松本清張

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社 新潮社
郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話東京(〇三)(二六〇)一一一一
振替東京八〇八番

乱丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替えいたします。

印刷・石福印刷株式会社 製本・憲専堂製本所
© Seichô Matsumoto 1961 Printed in Japan

新潮文庫

小説日本芸譚

松本清張著

新潮社版

1476

目次

運慶……七
世阿弥……三一
千利休……五五
雪舟……七九
古田織部……一〇一
岩佐又兵衛……一二三
小堀遠州……一四三
光悦……一六三
写楽……一八七
止利仏師……二〇九
後記……二二六

解説　針生一郎

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

小説日本芸譚

運

慶

1

仏師法印運慶は、京都の七条仏所の奥で七十六歳の病んだ身体を横たえていた。貞応二年の春の午さがりである。昼餉には、温槽に蘘荷、酸蕗、鶏冠苔の点心が出たが、わずかに梅干に箸をつけただけであった。食欲がまるでない。潮の干満のように睡気が繰り返してさして来るだけである。

工房の方からは絶えず木を挽く音や削る音が聴えてくる。それにまじって人声がする。一番高いのは息子の定慶の声である。そういう雑音が衰えた耳に一種の懈い調和音となって、眠い意識を心地よく揺った。

うとうととしかけていると、息子の康弁が足音を忍ばすようにして入ってきた。

「お目ざめですか？」

と彼は枕もとに寄った。

「蓮華王院の宜瑜さんが、見舞にお見えです。お通ししますか？」

その小声に運慶はうなずいた。宜瑜なら不快な相手ではない。睡気が去りかけると、人の話が欲しい気がした。運慶は衾の中で身体を動かした。

宜瑜が入ってきた。遠慮深そうに褥の脇に坐ると、長い眉毛の下に眼を細めて、

「御気分は如何ですか？　お顔色はだいぶよいようですな」

と上からさし覗くようにして云った。

運慶は、宜瑜の雀斑（そばかす）の浮いている皺の多い顔を見上げて、礼を述べた。陽は座敷まで明るい。今日のようなお天気は、外を歩けば気持がよいだろう。その陽ざしの中を健康な足どりで歩いてきた宜瑜が、運慶には多少羨しくないことはなかった。

宜瑜は世間話をはじめた。彼はこの三日に行われた闘鶏の模様を話した。その話し振りが面白いので、運慶は釣り込まれてきいた。その間にも工房からの木を削る音と人声は絶えず聴えた。

宜瑜は闘鶏の話が一段落すると、その工房の音に耳を傾けるようにして、

「いつもお旺んで結構ですな」

といった。それからつづけて、

「これだけ盛大になれば、あなたも本望でしょう」と述べた。

宜瑜は、運慶がここまで仕上げてきた七条仏所派の成功を賀しているのである。運慶の父康慶までは、いや、彼自身が中年過ぎまでは、彼らは奈良仏師という名で京都三条仏所派からは地方作家として一段低く見られていた。それが鎌倉幕府の援助の下に運慶が一門を率いて活動し、遂に主流となって三条派を衰微させ、この京の七条に仏所を構えてからは、完全に相手を蹴落したのであった。今では造仏を依頼する者は、この近畿はもとより、関東、奥羽まで及んでいる。七

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

条仏所といえば、名実ともに最高の権威となった。それは運慶が永い間に亙って目標を立ててきたことなのだ。宜瑜の言った、あなたも本望でしょう、という短い言葉にはこれだけの意味が含まれてあった。

運慶は、それにはあまり気の乗った返事をしなかった。今は、そんな話題には触れたくなかった。無論、宜瑜の賞讃には、それを肯定する満足感が底に横たわっていないではなかったが、仕事の話に調子を合せる気分はどうしても起らなかった。どこかでそれを忌むものが膜のように張っていた。

それは宜瑜が芸術を解さないからではない。現に彼の居る蓮華王院本堂には、運慶が年少の頃に彫った千手観音立像が残っていた。宜瑜はそれを珍重し、自慢にしている。彼もまた今まで運慶を支持してきた数多い中の一人であった。が、それだけに、今は仕事の話を避けたかった。妙に心が鎖していた。宜瑜が不用意に吐いた、あなたも本望でしょう、という一語が運慶の心に或る素直さを失わせたのである。

宜瑜は運慶の顔色の浮かぬのを見て、別な話をはじめた。彼はこの三月の上巳の日に、或る貴族の曲水に招じられた。その宴で公卿たちの歌の披講を聴いたが、当節の公卿どもの歌は末節の技巧に走ってまるでなっていないと批評した。それから一つ一つ辛辣な短評を試みた。

それは面白かったから、運慶は衾から身体をのり出すようにして聞いた。すると宜瑜はそのあとで、

「なかなか上手が居なくなりましたな。仏師もあなたのような人は後世に容易に顕れまい」
と云った。話題の雲行がまた怪しくなったので、せっかく開きかけた運慶の心は警戒をはじめた。が、今度は相手は彼の心に気附かなかった。
「安阿弥どのも相変らず立派な仕事をなさいますな。あの人は次々と宋の新しい様式を取り入れて、すっかり身につきましたな」
運慶はうなずいた。話題は彼の最も欲しくないところにきた。しかしこれは明らかに不快な表情を露骨に見せてはならぬことであった。運慶は衾のなかで身体の位置を動かした。
宜瑜は、安阿弥の、つまり快慶の賞讃をはじめた。それはありきたりの感想で、運慶は一向に耳新しくない飽いた言葉であった。が、遮ることは出来ない。彼は顔で相槌をうちながら、心は次第に乾いてきた。
もし、このとき長子の湛慶が註文をうけた造仏のことで相談に来なかったら、運慶は宜瑜の話を際限なく辛抱せねばならなかったに違いない。が、湛慶がそこに入ってきたので、宜瑜のながしりはようやく浮いた。彼は目下土佐に流謫中の土御門上皇を幕府が近く阿波に遷し参らせるらしいという消息を最後に聞かせて腰をあげた。

2

宜瑜が帰ったあとでも、運慶の気持は容易に和まなかった。一旦、投げ込まれた泥はひろがっ

て濁った。悪いことに、他人のきかせた言葉を反芻して、あとで棘の傷を深くするのが彼の癖であった。

あなたも本望であろう、といわれたことも一つである。宜瑜は彼の芸術について云ったのではなく、それとは別なことである。彼の造仏技術が京都仏所を圧倒したという意味にうけとるには、あまり単純過ぎるし、たしかに他の内容を感じた。それは芸術に関係のないことのみならず、背馳の精神と想われるものだった。これまでしばしば云われている運慶の統率力と政治性、つまり悪口で表現される「商売根性」をその言葉は含んでいた。無論、これは運慶の独り相撲の受け取り方であった。しかし宜瑜の何気なしに吐いた一言に、無意識にその内容が無かったとはいえない。それは彼がこれまで受けてきたどの批評よりも、一番彼の心を真黒に塗り、彼を反抗させた指摘であった。

それから宜瑜が、快慶の名を持ち出したことも心を乱した。快慶の評価については彼は変らぬ計算をもっている。しかるに世間の評価は近頃だんだん甘くなってきていた。運慶から見ると、愕くほど過大なのである。以前には快慶の芸術に冷たかった者も、ひどく寛大になり、いろいろと賞めるようになった。この変化が運慶に気に喰わない。要するに快慶の新しがりの工夫に、何か神秘な附加物を錯覚したとしか思えない。が、快慶と己との関係を考えると、運慶は世間のずれた見識に正面から反対することは出来なかった。その不当な忍従が、彼をいつも苛立たせるのである。

「ふん、宋の新様式か」

運慶は嘲るように呟いて衾のなかで寝返りを打った。

外は雲も流れないのか、陽は翳りもなく相変らずこの座敷に明るい。木の音と定慶の高い調子のまじる人声とは依然として聴える。運慶はもう一度、この懈い雑音の中に睡ろうと思った。

が、一度、妨げられた平静は容易に心に帰って来なかった。眠りたくも、睡気はどこかに去ったままであった。運慶はまた寝返りをして萎んだ瞼を塞いだ。思考の方は冴えるばかりである。運慶は諦めて、考えの湧くままを追うことにした。そのうち眠りに誘い込まれるかもしれないと思った。

一体、おれが快慶を意識したのは、いつ頃からであろう。——と運慶は考えはじめた。

——運慶の父の康慶は、東大寺の附属の仏師であった。父だけではない、祖父の康朝も、その父の康助も、その前の頼助も、悉くそうであった。それを辿ってゆくと定朝(じょうちょう)になるのだ。奈良に住んでいたから、世間では奈良仏師といった。

父の康慶は、その名前で云われると嫌な顔をした。中央の仕事をしている京都仏師からくらべて、所詮は田舎仏師だという軽蔑の響きがあった。父はそれを弾ね返そうとした。弾ね返す——それは造仏の技術でゆくより仕方がない。京都仏師に無いもの、異なったものを康慶は造り出そうとした。その血を運慶は完全に享けたと思っている。

彼は親父について童のときから彫技を習った。鑿の使い方を覚え、八寸角の樟の材が荒取りから次第に仏像に移りゆく歓びを知った。康慶はたいてい眼を光らせて彼の手先を見詰めたが、時には何とも云えぬ表情がその眼に映っているのに、ぶっつかることがあった。実際、康慶は他人には、彼に望みをかけていると語ったものらしい。そのころ快慶が居たかどうかさだかな記憶が運慶にない。何しろ弟子は多勢いたし、技術はほとんどみんな同じ位であった。そうだ、あの頃は快慶は彼の意識になかった。

父の康慶は何かを創り出そうとしたが、まだ発見には到着していなかったと運慶は思う。その証拠に彼が十七八のころに父の指図で造った蓮華王院の千手観音は在来のものと型が殆ど同じである。定朝が造り出した様式から脱けてはいなかった。どんな才能ある人間でも、時代の様式の固定観念の中に、暫くは蹋まねばならないのだ。

康慶の仏所は奈良に在った。仕事は東大寺や興福寺の造仏や修理であった。東大寺には天平の仏像が数知れず安置してある。その修理に従うことで、康慶たちは天平の古仏に毎日親しんできた。だが、それに憧憬し、その容を取り入れようと彼が思い立ったという考え方は妥当のようだが、時間的な飛躍がある。時代の様式の呪縛は、そこまですぐに解放はしない。

それに造仏は仏師たちが勝手にやるのではもとよりない。註文をうけてからかかる職人仕事なのだ。願主という註文主の意に叶わなければ一体の仕事もない。それから註文主の方が時代の様式に何よりも忠実であった！

この様式の規律と、四百年以上の時間的な距離の観念に妨げられて、康慶たちは天平仏に親しんでも、まだ密着がなかった。驚嘆はあっても、それが彼らの技術や仕事に密着しない限り、ただの観賞者に過ぎない。彼らの眺める眼は、まだ遠いものであった。

運慶は二十五六歳のころに、円成寺の大日如来像を造った。父の指導で、ほぼ一年がかりで仕上げた。この出来は大そう見事だったので康慶も賞め、願主もよろこんだ。だが、これも時代の様式に従ったというに過ぎない。

あの頃は、快慶もさほど目立たなかった。何しろ、みんな同じようなものを造っていたからな。——運慶は眼を閉じながら、そんなことを思いつづけた。

3

だが、一つの情景が運慶の記憶にある。そこだけは、陽が射し洩れたように明るい。

運慶は父の康慶と一しょに高野山に詣でた。いつだったか忘れたが、何でも早春の日であった。諸堂の諸仏を拝して廻るうちに遍照院の一隅に忘れたように置かれた仏像があった。暗い場所だったから、それを大日如来像と判じるまでには、いくらかの時間を要したくらいだ。運慶は案内の僧から燭をかりてそれを仔細に見た。それは他の仏像とは違っていた。何か粗(あら)い感じのする作風であった。

「これは、おれの親父、つまりお前の祖父の康朝が作ったのだ。当時は願主に気に入らなかった

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com